

期にふさわしい生活

—— 幼・小の生活や学びの連続性を探る ——



2005

島根大学教育学部附属幼稚園

はじめに

—遊びのなかで学ぶ幼児期の特質と小学校との連携—

島根大学教育学部附属幼稚園長 山下 政 俊

今、わが国の教育は、子どもの「学ぶ力や学ぶ意欲の低下」という側面から省察がなされ、その是正が図られようとしている。その際、新たに求められ創造されるべきは、これまでのような単なる他者や集団に準拠した競争的な学び、知識の記憶量を増大させるだけの学び、無味乾燥な机上の学びではなく、また他と関係のない個人主義的・閉鎖的な学びでもなく、物事の全体と感覚的・知的・体験的に関わり深める学び、自己に固有なものでありながら広く共有できるものでもある学び、学ぶ意味・仲間・世界がひらかれていくような学びでなければならない。

そのような学びは、幼児期の遊びやそれを通して生じる学びとどのように通底しているのだろうか。

小学校における各教科の授業を契機に本格的に始まる学びにおいては

1. 小学生の学ぶ目標・内容・方法は、教科の依拠する専門科学の論理や方法、学習指導要領・教育課程にコントロールされる。そのため学びは、教科・教材に固有な内容のスコープ（範囲）とシーケンス（順序）に即して進行することになる。その点で幼児期の学びは、いわばそれを未分化のまま持ち合わせている、あるいはそれを随伴する遊びのなかで行われる。人間の活動のなかで最も自発的なものであり、「楽しく・面白く・愉快地」を基盤や動機とする遊びを進めるなかで子どもは、小さな専門学者として興味・関心の趣くところで経験と直感で可能な内容と方法により物事に働きかけ、目的としてではなく結果としての学びを成立させることになる。そこではあくまでも遊ぶことが目的であり、学ぶことが目的ではないからである。
2. 小学生の行う物事を認識する過程は、教科・教材に固有な概念・法則・形象などに規定される。そのため学ぶ事象や対象は、その具体化・具象化として経験的・実践的に受容・理解されるだけでなく、その基礎・基本となる教科に即した抽象化・概念化として理論的・知的にも理解・受容されねばならない。その点で幼児の物事の認識は、遊びのなかで欲求・結果として行われ、これまでの経験の範囲に基づく感覚的・直感的な把握（この時期に特有な概念形成）が中心となる。それを超える抽象的表現や教科的言葉での理解という学びは、次の段階からの楽しみな課題として残し、ここでは、その強力な「壁」への挑戦のため、それを乗り越える経験的土台づくりに努めることが重要なことになる。
3. 小学生の学ぶプロセスでは、教科・教材の本質を確かに豊かに自分のものとするために最適で最善の活動や表現（それへの働きかけ）が子どもに求められる。そのため学びにおいて子どもは、対象や事象を自分の思考・判断や経験に合致させるだけでなく、それらの性質に合致して活動や表現を意識的に想像的・創造的に構成しなければならない。幼児の

場合、対象や事象に対する活動や表現は、遊びの持つ独特の論理と心理のなかで行われるため、それらが困難となる、つまり遊びの外延や内包を超えると、それを止めることもそれから離れることも許されている。非強制的で自発的な構成主義の学びとしての遊びの所以である。

4. 小学生の学びにおいて活動や表現を推進していく原動力となるのは、子どもの興味・関心、欲求・追究心を喚起する教科・教材に固有な問題・課題である。そのように重要な問題・課題は、教師によって提起されることが多く、彼はそれらで子どものなかにわからない、できない、したがってそれを打開したい状況を引き起こすことにより学びの成立を意図するのである。幼稚園では子どもは、それを他から直接与えられるのではなく、まさに遊びのなかで自ら感じ取った興味や関心のあるものを問題・課題として設定するやそれに没頭・集中し、その解決・理解・解釈・作業・創作などを求める活動や表現として自らの側からひらいていくのである。
5. 小学生の場合、その学びは学級教授組織のなかで学習指導要領・教育課程の下、他者や集団とともに共同して、あるいは交流しながら行われることが普通である。そのため学びは、子ども全員の参加と共同、彼らの間の相互作用、それを介した知識や技能と意識や行動の発展を目指して行われる。幼児においてそれは、基本的には、幼稚園教育要領の下、一人ひとりの自発的な取り組みとして、つまり固有な遊びとして表現・展開される。その学びに通じる遊びでは共通の教科書や問題はなくても、子ども同士の運動感覚的接触・交流を通して彼らなりの参加と共同、感応した中身による相互作用が行われる。その遊びとしての学びは、意図的・計画的・系統的なものではないが、いわば偶然的・一次的・一過的なものでありながらも、幼児期を象徴する総合的でコアとなる知識や技能、意識や行動を子どもにもたらすのである。

幼稚園と小学校は、上述のような学びをめぐるその相違や非連続性にもかかわらず、子どもの成長や発達において深い内的な連続性を有している。双方の教育者は、その連関を洞察・認識しながら、今日課題となっている小1プロブレムや学級崩壊を見据えて緊密で柔軟な相互連携を図らねばならない。そのことに関わる確かで豊かな連携が始まり、さらにその歩みが確実に前進しつつあることに喜びと期待を持つのは、私一人ではなからう。

目 次

期にふさわしい生活

—幼・小の生活や学びの連続性を探る—

はじめに

I 研究主題について	1
II 研究の課題	1
III 幼・小連携のあり方、見通しについて	2
IV 1、2年次の取り組みについて	3
V 本年度（研究3年次）の研究目標	6
VI 今年度の研究の取り組みについて	6

実践事例

1. 幼児期にふさわしい学びを生み出すための活動の構想、環境の構成と保育者の援助を探る

(1) —3歳児—

事例1 3歳児の発達の過程の中で捉えた学びの姿	13
A 泥だんご遊びから	
B レストラン遊びから	
C 保育者のかかわりと遊びの変化	
D トラブル場面から	

事例2 身近な生き物との出会いの場面から —3歳1～2期（4～6月）の学び—	23
-------------------------------------------------	----

(2) —4歳児—

事例1 6期～8期の子どもが展開した生活における保育者の援助を探る	27
事例2 「人」や「もの」とのかかわりから学ぶ	33
事例3 4歳児の遊びの中で捉えられる数量的な経験	38
A ザリガニのあかちゃんがうまれた！	
B だいこんさん、おおきくなーれ！	

C	せんせい表をつくって	
事例 4	子どもの興味関心を揺さぶる活動 —大学教授とのバードウォッチング活動を通して—	43
(3)	—5歳児—	
事例 1	「みんなで泥んこ遊びをしよう」の活動を通して	47
事例 2	友だちとともに身近な生きものとかかわる生活 —「生きものニュース」の活動場面をもちながら—	52
事例 3	「劇遊び」を通して友だちと学び合う姿から	61
(4)	幼児期に大切にしたい養護教諭の役割と取り組み	67
2.	幼・小双方向の学びを生み出すための合同活動のあり方を探る	
事例 1	附属小学校3年2組と年中組（4歳児）の幼小合同活動から	71
事例 2	附属小学校5年1組と年中組（4歳児）の幼小合同活動から	77
事例 3	「ころがしドッチ」の遊びにかかわる子どもの姿より —合同活動をきっかけに始まった遊び—	79
事例 4	附属小学校4年2組と年長組（5歳児）の合同活動から	87
VII	研究のまとめ	91
VIII	今後の課題	93
	「幼年期教育研究プロジェクト」同人からの提言	95
	おわりに	110

幼児期にふさわしい学びを生み出すための
活動の構想、環境の構成と保育者の援助を探る

(1) — 3 歳 児 —

幼児期にふさわしい学びを生み出すための
活動の構想、環境の構成と保育者の援助を探る

(2) — 4 歳 児 —

幼児期にふさわしい学びを生み出すための
活動の構想、環境の構成と保育者の援助を探る

(3) — 5 歳 児 —

幼児期に大切にしたい養護教諭の役割と取り組み

幼・小双方向の学びを生み出すための
合同活動のあり方を探る

「幼年期教育研究プロジェクト」同人からの提言

お わ り に

平成16年4月、島根大学教育学部は、鳥取大学との協定に基づき、教員養成に特化した学部衣替えしました。

「島根大学教育学部における今回の改革を一言で表現すると、学生（学校教育養成課程）に幼稚園と小学校それぞれの教育課程を各専門分野から総合的に学ばせ、幼稚園と小学校双方に見識のある教員養成を目指す、というものです。この考え方は、学部教育だけでなく、附属幼稚園と附属小学校の教育課程にも反映されなければなりません。小学校が幼稚園での保育を理解し、幼稚園が小学校における教育を確実に予測することで、より無理のない幼児期と1・2年生の教育を保証できると考えているのです。その意味で、今年度の研究では附属小学校1年生との共同作業を開始できたことは重要な意味を持っています。」(平成15年度・16年度研究同人 田中 昭：平成15年度島根大学教育学部附属幼稚園研究のまとめ「はじめに」より抜粋)

平成15年度（本研究副主題第1年次）の研究は、前述のビジョンを踏まえて、本園4歳児と附属小学校1年生を対象として「共に学び合う活動ー遊び名人になろう」という活動を設定し、実践しました。私たちは、このような試みを通して、子どもの活動の姿を幼・小双方のねらいの観点から多面的に捉え、幅広い視野から考察していくことによって、より深い子どもの発達理解に根ざした「幼児期」と1・2年生の教育活動のあり方や実践的方法を探っていきたいと願いました。

以降、附幼から附属小学校の先生への働きかけと、附属小学校の先生からの個別的な幼稚園への提案により「附属幼・小の子どもたちが共有する活動」（平成16年度以降「合同活動」という）を設定し実施しました。そして、活動の中で子どもたちの姿の記録をもとにして、附幼と附小の教員が互いに考察したことや感想を出し合いました。また、次の活動の構想にあたっては、事前に附幼・附小の教員が意見を交換し、幼・小の子どもたちが共有する「合同活動」の内容と双方のねらいを検討して実施しました。その度に、私たちは少しずつ「合同活動」の教育的な意義を見出してきました。

そして、幾度かの「幼年期教育研究プロジェクト」（P. 6参照）での協議の中で、小学校の先生に、幼稚園教育の本質と、保育の構造・環境の構成・具体的援助・経験する内容などを、解かってもらえるように伝えることや、それらの言葉の解釈を共有していくことの大切さを改めて感じました。このことは幼・小共同での研究を目指し、進めていくに当たっての方法上の課題となりました。

そこで16年度から、私たちは、改めて3歳から6歳までの、発達の各時期に展開する遊びの中で、一人ひとりの子どもが経験したり学んだりしている内容を、より詳細な観察記録と多面的な視点から分析し、幼児期における「学び」の実際を附幼・園児3年間の発達の過程に基づいて継続的に再整理していこうと試みました。

また、その研究を小学校の先生たちと共有していくためには、今後幼・小の共通の理解に基づく言語で発達を捉え、分析していくことが必要な条件であると考えます。

私たちはこの研究の課題を改めて以下のように位置づけたいと思います。

「幼児一人ひとりが小学校入学初期においてより実り多い学習活動を展開するためには、小学校教育との接続を図ることが必要である。

接続を図るとは、幼稚園の教育課程を小学校に合わせて準備するということではなく、まず幼児期と小学校1・2学年までの時期の子どもの発達と経験や学びの連続性を幼・小の教師が把握し理解すること。その上で、幼・小の教育の特質を踏まえ、子どもたちがより自然に異なる学習環境に適応し、幼稚園で培ってきた力を主体的に発揮できるようにするため、幼稚園ではどのような経験が小学校の1・2学年における学習の基礎として重要かつ必要であるか、また、幼稚園での経験を生かすためには、小学校1・2学年でどのような学習の展開方法が考えられるかなど、双方の教育内容の質的な見直しとともに、なおいっそう適時性を考慮した学習環境と指導方法を工夫改善していくことである」と。

最後になりましたが、平成15年度～17年度の実践研究に当たって、島根大学教育学部の先生方・附属小学校の先生方から多くのご協力と研究上のご示唆をいただきましたことを、心からお礼申し上げます。

平成17年11月吉日

副園長 野 津 道 代

— 研 究 同 人 —

島根大学教育学部附属幼稚園

園 長 山 下 政 俊
副 園 長 野 津 道 代
教 諭 星 野 和 美
梶 原 泉
平 田 有 美
伊 藤 鳴 美
養護教諭 福 本 智佳子
講 師 岡 崎 由美子
山 崎 陽 子
長 尾 千 晶

(平成16年度)

園 長 田 中 昭
副 園 長 周 藤 友 幸

島根大学教育学部

金 山 剛 志 (附属小学校)
川 路 澄 人 (初等教育開発講座)
倉 田 さつき (心理・発達臨床講座)
陶 山 昇 (附属小学校)
高 井 弘 弥 (心理・発達臨床講座)
田 中 昭 夫 (初等教育開発講座)
西 田 忠 男 (初等教育開発講座)
廣 兼 志 保 (初等教育開発講座)

研究紀要第36号

期にふさわしい生活

— 幼・小の生活や学びの連続性を探る —

発行日 平成17年11月1日

発行者 島根大学教育学部附属幼稚園

印刷所 株式会社島根県農協印刷